

蹶起盡瘁之時也。而君今也。則亡焉。悲夫。我等跋涉肥筑之山河。茲十有餘日。共苦樂。全寢食。或探舊跡。或尋名勝。或觀察人情風俗。以鍛筋骨。練心膽。而獨不與君全此行。痛恨何已。今聊行捧銃之禮於墓前。以表平生纏綿之情。靈而有知。尙來饗。

冬十二月

含紫樓主人批

曉發

不老庵主人

さきつ日の行軍に、朝さくありあけの月影いと冴えたるに、列を整へて、喇叭は聲勇ましく立ちいづれば、見渡す限り、野も山も霜いと白うおきて、面を拂ふ朔風の寒さ、銃把る指も凍りて赤くなり、つく息も氷るかど覺えて、いとたへがたげある程に、夜も白らくどあけわたり、朝日いとすらく立のぼれば、身もやうくのどかにありぬ。こゝらの氣候のいとおだしきにも、かはどの苦はあるものを、まいて遠く唐土のはらに、軍せるつはもの共の勞やいかあらん、彼地はこゝにも聞及ばぬ、寒氣の強き所なりときけり、飢を忍びつゝ、夜をこめては、闇路をたどる折もあらん、あるは路なき所をふみまよひては、澤に陥る時、もあらん、あるはみ山の木の下の岩が根よ宿りては、虎たはかみの聲にも、夢驚かさるゝこともありなん、日本の本のみすらを

海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍と誓へるも、うつし身のいろでか千々のうきことよあやまざらん。つくづく此を思へば、我大君のこよなき大御恵とはいへおのれらが心やすく窓の下におのがじい好める道を、あさゆふ學び習ふも、かたじけなきわざにあんありける。せめては此冬ばかりは、襲ね衣の一重だにも、薄うし、火桶の理火をも白うして、かのつはもの共の勞を、東の間も忘れぬよすがともせば、やどこそ、思ひ出づれば、あうつきの寒さも、覺えずありぬ。

苦中の苦をおもへば、苦も苦にならずと古の人のいひけんこの文もその心あり

縁堂批

明治二十七年。我

皇上命陸海軍問清國之罪。七月進戰

於朝鮮牙山。十月入其國境。天兵所向。

如折枯挫朽。至十一月二十二日。遂略

取要港旅順。胤永聞之。不勝抃喜。乃作

五絶句。以賀之。更期其勝云。

天降神人大八倒。臣民感化幾千秋。忠肝義膽悉甘死。壓壓洲支那四百州。

其二

虛名不好范文子。無禮何甘北相州。大義此行天地識。應兵況又有餘謀。

其三

海沈船艦陸降城。將士眼中無滿清。破竹勢成年。欲晚好屠封豕賀新正。

其一

教授 秋月 胤永